

特集 / 生命の倫理から性を問う

男はいつまで男たりうるか

- 中高年男性の性を考える -

熊本 悦明

〔札幌医大名誉教授・(財)性の健康医学財団名誉会頭〕

〔産婦人科の世界：vol.51；211～228,2000年；医学の世界社〕
より転載

はじめに

今や人生80年時代を迎え、生殖年齢期の20歳から50歳までの30年に匹敵する、もう1つの30年という生殖後年齢期間を生きられるようになった。医学の進歩により、たとえ元気に重い病気にもかからず、その30年を生きられるようになったとしても、QOLが高くなければ意味がないわけで、与えられた新たな30年の中にいかに医学的に高いQOLを創り出していくか、21世紀へ向けての大きな医学的、否、社会的課題といって過言ではない。

都市計画の専門家の話では、町を創るにはまず家を建て、上水道や道路を整え、その上下水道を完備させる。しかしそのようなinfrastructure創

りだけではなく、その上に“ゆとりの場”としての公園や劇場、美術館などの文化施設を創ることによって、初めて文化都市になるという。

それを医学的立場から人間にanalogyさせると、空調のある家にあたる呼吸器系、上水道にあたる消化器系、道路にあたる循環器系、そして下水道にあたる泌尿器系などについて、一応基本的な健康管理が行き届いたとしても、潤いの場としての文化施設にあたる男として、女としての“性”が健全に充たされていることが、味わいのある生活、高いQOLの保持が可能になるのではないかと考えている。

ただ生殖後年代の生殖を終えてしまった中高年者にとって、“性”がどのような意味をもつものなのかという疑問が当然出てくるはずである。そ

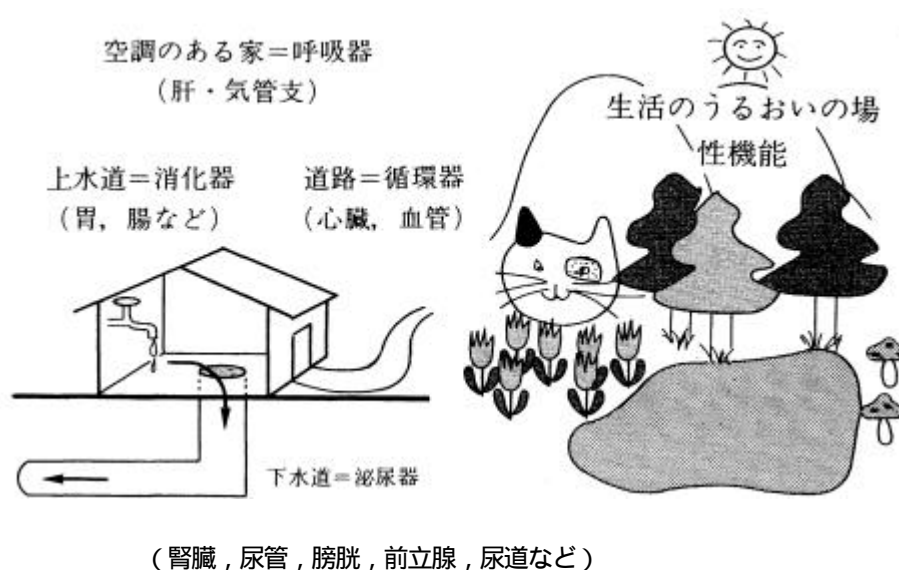


図1 都市計画=健康管理

ここで中高年者にとっての性について、改めて考え直してみたい。

人間は生きるために食・性・群の3つの本能をもっている。食本能は個体維持のためであり、群本能は個々が安全に生き、種を保持するためには群を作って生活するためのものといえよう。そしてその2つの本能をつなぐものとして性本能がある。その性本能には図2に示すように、まず男と女が最少の群、pair形成をし、そのpairの中での性行為により生殖が可能になり、次世代の誕生、そしてより大きな群形成に発展していくという2つの要素、役割をもっている。

しかし中高年者には、性の第2要素である生殖はすでに終わっており、関係なくなるわけであ

るが、第1の要素としてのpair形成、skinshipとしての性は残っている。むしろそれが生活のQOLの重要な要素となって強く浮かび上がってくるはずである。中高年になり、それまでその中で活動していた社会という大きな人々の群から定年退職するようになると、次第に孤立化してくる。そのために、夫婦のpairとしての生活が生活の基盤となってきてpairが向かい合うskinshipとしての性の意義が再認識され、その重要さがとみに増してくることになる。

よく冗談に“人畜無害になった”などと、“性”のことを無用のようにいう風潮があるが、我々の調査では図3、4に示すように、男女とも高齢になっても性生活としてのskinshipのないことにより、生活の潤いや満足度が低いと感じている人がかなり多いことが明らかになっている。本音と建て前とは異なり、やはり男として女としての体温を温め合う、生き物としての生命感を味わう生存の認識をもつことの意義は、QOLの基本にあるといつてよい。

個々人の生活条件で生(life)の中の性(sex)の割合は異なるにせよ、黄体のない卵はないように、男と女の生理的な、また心理的な交流の欠けたlifeは味気なく、人間味のないものといえる。

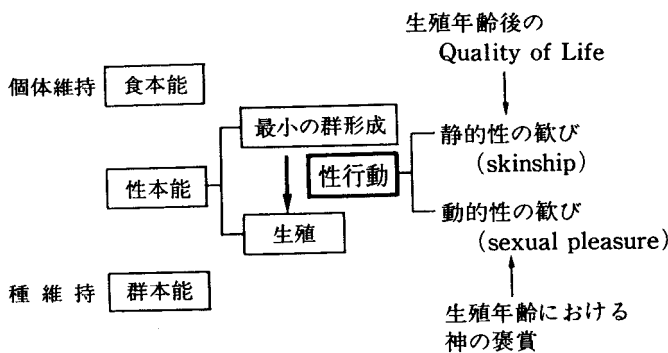


図2 性の生物学的意義

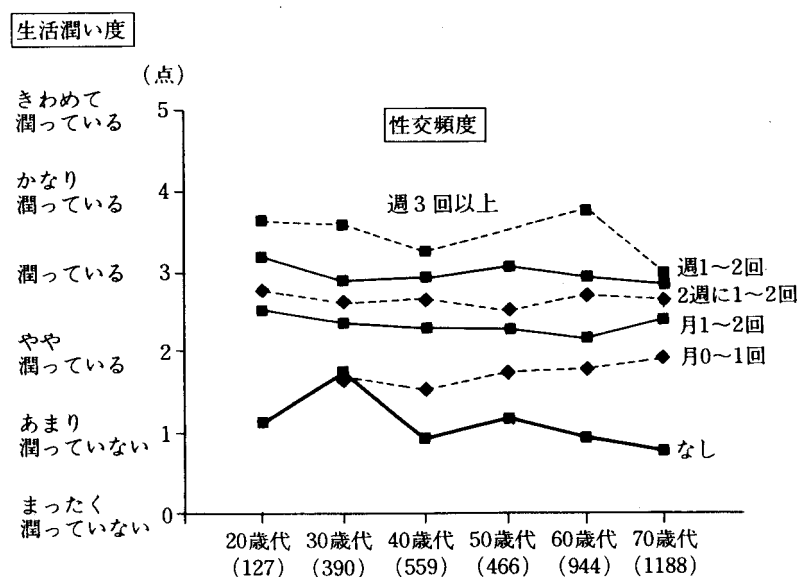


図3 健常男性における性生活による生活潤い度一年代別、性交頻度別の検討一

そこで生殖を終えた中高年のQOL保持の重要な鍵を握る“性”につき，Andrologyの立場から男性側に焦点を合わせて，少し考えてみたい。

1. 男の性を創るもの

さて，その男の性を創るものはAndrogenであるといってよい。そのAndrogenとしてもDHEAやAndrostenedioneもその生理的意義は

種々論じられているものの，やはり基本はTestosterone，特に生物学的活性のあるfree Testosteroneといってよい。

その血中free Testosteroneの加齢による変遷は，図5に示されるように，思春期に上昇し，20歳前後でpeakになり，以後漸次下降していく。ただその下降にはかなりバラツキがあり，若年時代の高いレベルをかなり長く保持するものから，

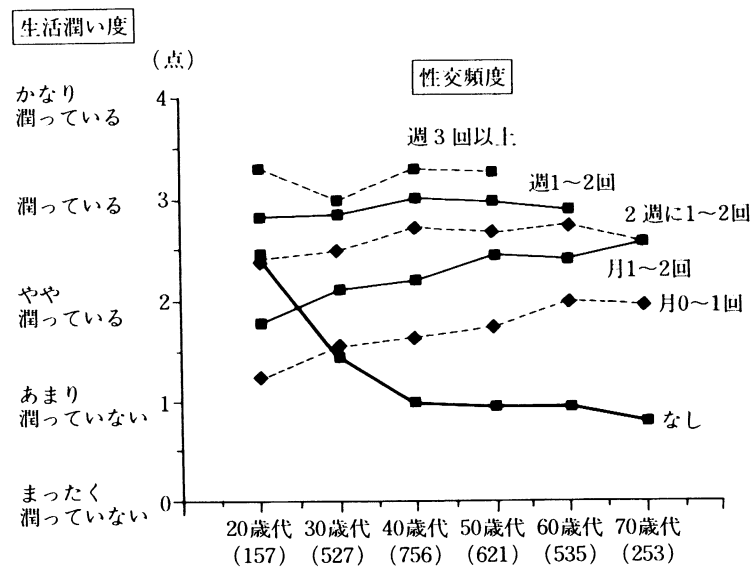


図4 健全女性における性生活による生活潤い度一年代別，性交頻度別の検討一

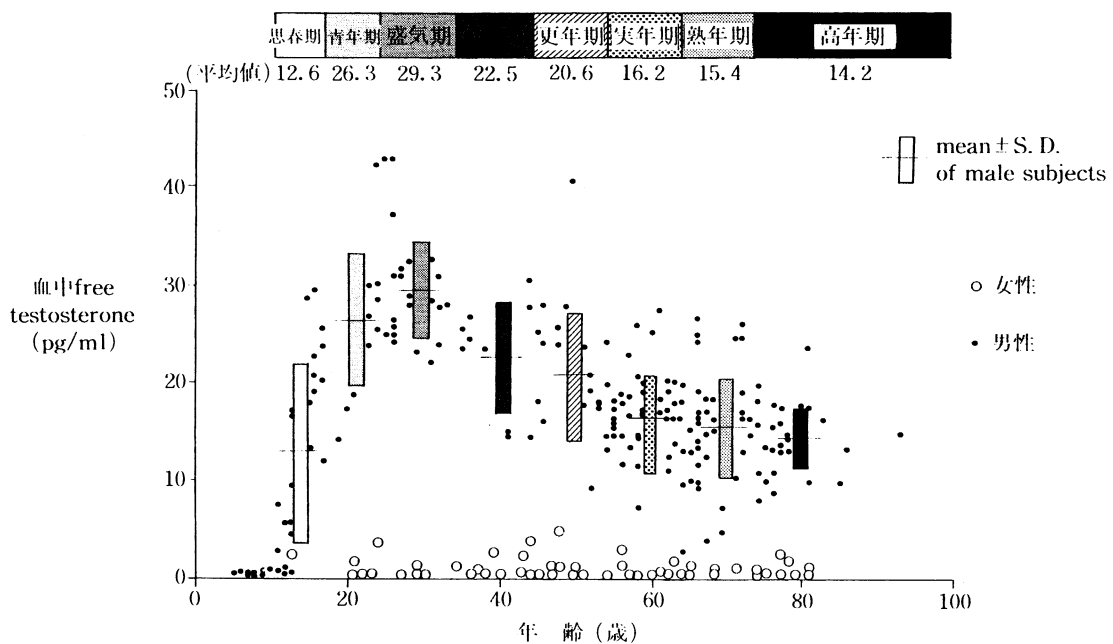


図5 加齢に伴う血中 free Testosterone の変化と性差

早くから下降度の強いものまで、個人により著しい差が認められる。その多様性が、女性が閉経期を境にEstrogenレベルが一様に下降するというパターンとかなり異なるわけで、男性の加齢による“性”の推移に著しい個人差を生じさせている理由でもある。

2. 男性としての心理的性役割の変遷

一口に“性”といっても、その中には身体的な形態や生理機能としての性も当然含まれるが、さらに心理的な性役割 (gender role) や行動科学的な立場から性も含めて考えなければならない。

そこで、まず心の性、男らしさMale gender roleについて、それが加齢でどのように変化するかを検討してみたい。

紙面の都合で心理検査法の詳細については説明を省くが、健常男性の各個人それぞれに、男性性役割と、もう一つの男性性格として特徴的な攻撃性Aggressivenessについて、心理学的テストを用いて検討した。判定は、すべて1人の臨床心理学教授に年齢その他をマスクして行ってもらい、後で図6, 7のごとく、年齢別に集計し、客観性をもたしてある。

男性性役割Male gender roleの強さの各年代

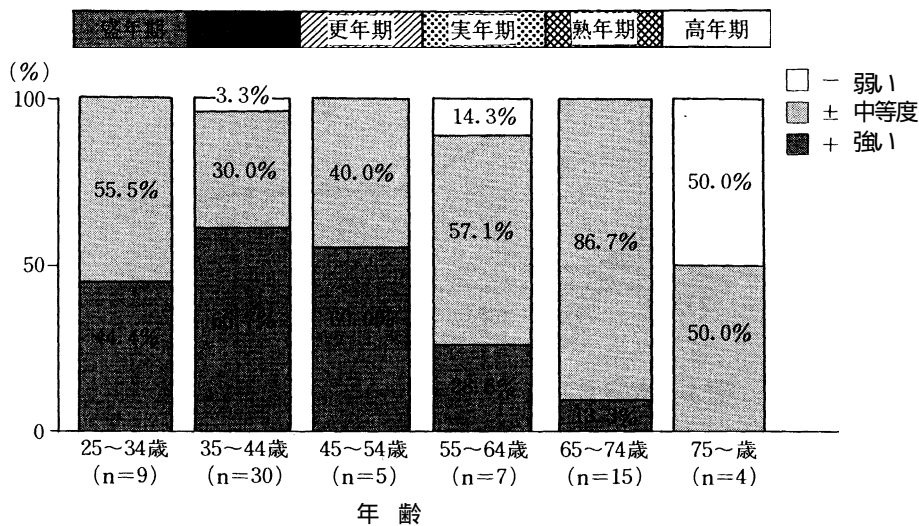


図6 成人男性におけるMale gender role (男性性役割) の年齢別頻度

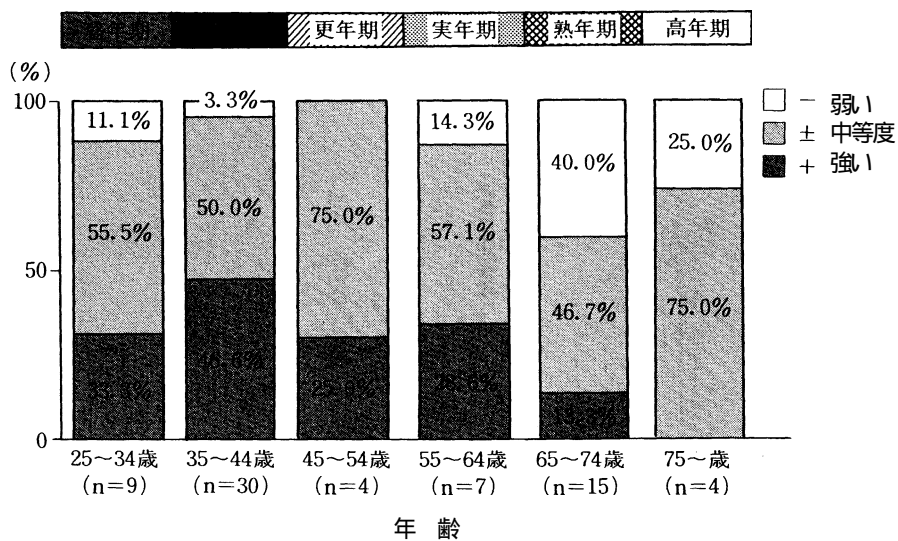


図7 成人男性におけるAggressivenessの年齢別頻度

における分布は図6にみられるように、前述した図5の血中free Testosteroneのpeakよりやや遅れて、30歳後半から40歳の壮年期にpeakがあるものの、その後加齢とともに徐々に下降してきている。また、攻撃性Aggressivenessについても加齢との変化はほぼ同様な推移がみられている。

これらの心理学的dataとfree Testosteroneとの相関性を年齢別に検討してみると、図8のごとく、同じ条件の同年齢の中でもfree Testosteroneが低くなると、Male gender roleやAggressivenessが低下していることがわかる。

この成績からみると、年齢をとり、男性が柔和になっていくのは、血中free Testosteroneの下降もかなり意味をもち、世にいう経験を積んで角が取れ、人格が円満になったというだけではすまない生理学的な変化が背景にあることが示唆されている。

3. 生理的な性機能の加齢による変化

次にもう少し具体的な男の性の身体的な特徴である生理的な性機能、すなわち陰茎勃起能について加齢によりどのように推移するかを検討してみたい。

陰茎の勃起現象は、陰茎にある陰茎海綿体に入

る動脈の関門が開き、怒涛の血液が急激に流入することで、陰茎海綿体が膨張することにより起こる。まず性中枢の興奮が起こり、その刺激が伝わると、図25で後述するが、局所の神経末端から一酸化窒素NOが分泌され、それによりcGMP産生が起き、その作用で血管平滑筋が弛緩し、血管関門が開くことで大量の血液の流入が起こる。このcGMPの作用を高く維持することに、今話題となっているViagraが関与しているのである。

ただ、この陰茎海綿体流入動脈の関門が開くのは心理的に性的興奮の時のみでなく、睡眠中のレム睡眠期にも夜間睡眠時勃起現象（Nocturnal penile tumescence : NPT）が起きているのである。レム睡眠期には身体の他のいろいろな生理機能もある程度動くことは知られているが、陰茎も性的興奮時に備えて、“夜中に素振り”をしていると考えればよい。レム睡眠期に副交感神経系が短期的に興奮し、ノンレム期に静まる。その繰り返しのため、陰茎は勃起・縮小を何回か繰り返している。その最後の勃起を早朝勃起（朝立ち）として本人も気付くことになる。

図9に、そのように繰り返されるNPTによる勃起時間合計の全睡眠時間に占める割合が、加齢とともにどのように推移するかを示した。これ

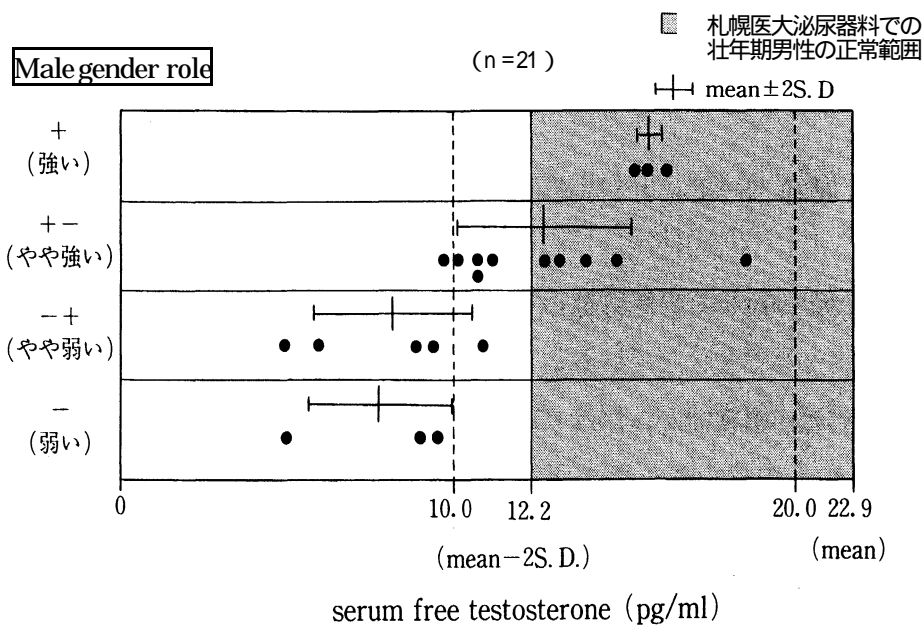


図8 高齢者（60歳以上）男性における血清free Testosterone値と Male gender role

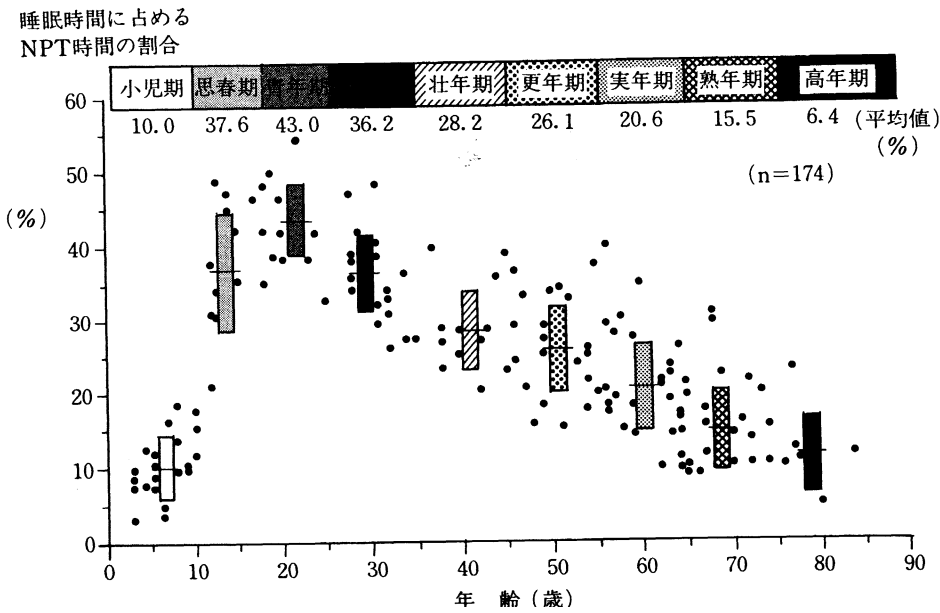


図9 睡眠時間に占める夜間睡眠時勃起陰茎 (NPT) 時間の割合の年齢による推移

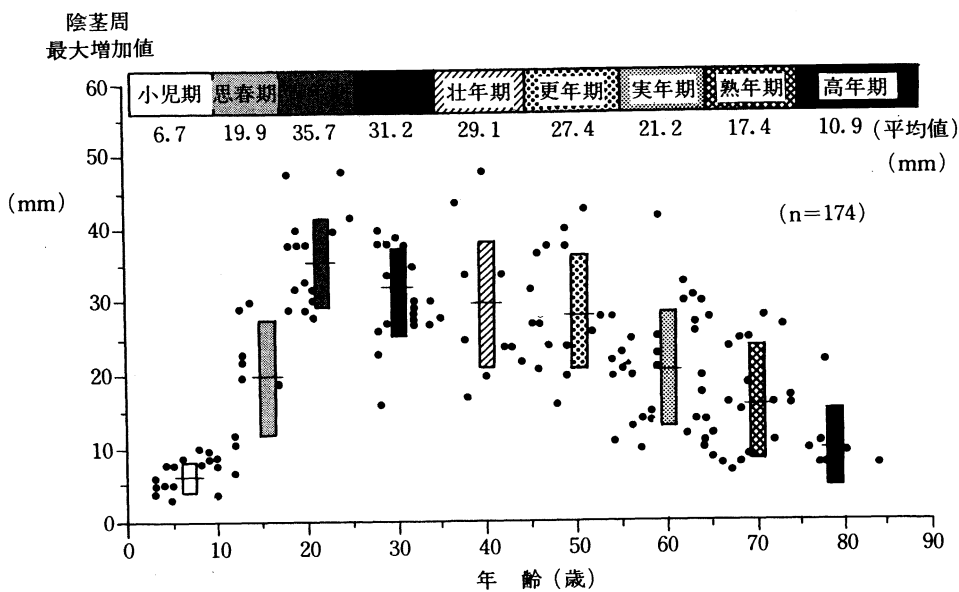


図11 NPTによる陰茎周最大増加値の年齢による推移

が前述の血中free Testosteroneの年齢推移 (図5) とほぼ同様なパターンで変化していることがわかる。これは脳の勃起中枢機能が、かなり血中Testosterone依存性のものであることが示唆されている。図9にみられるごとく、20歳代では睡眠時間の半分近くも陰茎勃起が起きているし、60歳代でも睡眠時間の1/5は勃起しているという隠れた現象があることは案外知られていない。

ただその陰茎の夜間勃起現象も、加齢によりその強度が徐々に低下してくるわけで、図10に示すごとく、陰茎勃起時の最大周径が20歳前は3~4cm増加しているのに対し、加齢によりそれが徐々に小さくなっていく。ことに50歳を境にその下降度が少し著しくなるのは、脳の性中枢よりの神経刺激の弱化的他、陰茎局所の血管系や海綿体自体に加齢による線維化現象が進み、血液流